

東日本家族応援プロジェクト 2020 in 多賀城・石巻 リモート を開催しました！

人間科学研究科教授 村本邦子

10 年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城・石巻」もリモートで開催、最終年は来年度に持ち越すことになった。現地に行ってみなさんに直接お会いできないのはとても残念だが、このような形でもみなさんにつながることはありがたい。慣れない環境のなかで、快くご協力頂いた現地のみなさまに心から感謝したい。

リモートならではの良さも感じている。第一に、院生たちに、すべてのプロジェクトに関わってもらえることができる。そのために、チームを組み、担当者に土地の状況やプロジェクトのこれまでの綿密に調べて事前調査の報告をしてもらう。毎年やっていることではあるけれど、さらに時間をかけ、入念な準備をしている。いつもは担当地以外は間接的な報告だけを聞いていたものが、直接現地の方とつながることで、院生たちのコミットメントが高まり、土地への思いも強くなる。

第二に、修了生たちを招いてつなぐことができる。今回は、増尾佳苗さんに、D-MAT 隊員としての多賀城体験、プロジェクトとの出会い、大学院入学、プロジェクトメンバーとしての多賀城体験、救援活動についての研究と修論作成、現在と順を追って体験を共有してもらったことで、現役院生に大きな刺激となっただけでなく、私たち教員にとっても、違った視点から被災地とプロジェクトを考える貴重な機会となった。現地の方々にもなにがしか新たな視野をもたらしてくれたように思う。

第三に、ほんの少しだが、ふだんは一緒にできない現地のみなさんをつなぐことができたこと。とくにみやぎ民話の会の加藤恵子さんには、プログラム全体に関わって頂き、さらに 12 月の福島のプログラムの紹介までして頂いた。今後は、さらに現地をつなぐという試みを意識的に作ってみようと思うようになった。何年か前、むつで、「プロジェクトに関わった人たちを縦に横に、つまり時間を追って、また東北 4 県をつないで同窓会にすればかなり大きなものになりますね！」という話が出たことがあったが、本当にそんなことも可能かもしれない。

最後に、今年、このような新しい形でプロジェクト継続を模索するなかで、十年プロジェクト終了後のつながり方についても少しずつイメージが拡がり、みなさんからのアイデアもいろいろ出されている。本当にうれしいことだ。まずは 2 月のシンポに向け、最終年である来年、そしてその後についてもクリエイティブに試行錯誤しながら新たな道を探っていきたい。

プロジェクトの内容を院生たちがまとめてくれたものを下記に続ける。

10 月 3 日（土）10 時-12 時は、「災害直後の応急体制に携わった経験から今おもうこと～DMAT 隊員と被災者・行政が見た多賀城」として、増尾佳苗さん（大津赤十字病院 DMAT

隊員・災害看護）が「災害救護者が再び臨地に立ち知り得た事」、丸山隆さん（多賀城市建设部都市計画課次長・課長）が「被災者の目・行政の目で見た東日本大震災の記憶」を語ってくださった。震災直後から DMAT 隊員として現地に入った増尾さんが目撃した現実想像を超えるものであり、DMAT の活動を終え自分の生活に戻った増尾さんに残ったモヤモヤが東日本家族応援プロジェクトの参加によってはっきりするプロセスをお聞きすることで、災害支援の在り方について考えさせられる機会となった。また、丸山さんの話では、自身の被災体験や被災者兼行政の人間として、同じ被災者をまとめ上げる大変さなどが実体験をもとに語られたことで、現地の方々がその時何を見て何を考えていたかについての理解が深まった。参加者アンケートには、「私自身が今すぐ出来ることはないのかも知れませんが、まずは自分を守ることが誰かを支えることに繋がるのではないかと思います、お話を聞いた後、避難バックを作りました。まだまだ勉強不足ですが、今日伺った話を生かせるよう、今日考えて終わりではなく、これからも考え続けたいと思いました。」「震災当時を振り返る意味で、とてもよい企画だと思います。講師の方のお話もとても良かったです。ありがとうございました。」などの感想が寄せられた。

13 時-15 時は、ミニシンポジウム「復興を支える民話の力」として鶴野祐介先生、宮城民話の会の島津信子さん（代表）と 加藤恵子さん、村本邦子先生からのお話があった。民話の話では、民話という「語り」の重要性を学ぶことができた。参加者からは「心の復興には時間がかかるけれども、民話を生かすことが復興に繋がっていくのではないかと思います。」「民話を語り継ぐことは形をもたない技術であり、自然災害からも奪われないう、素敵な文化だなあと感じました。」などの感想があった。

15 時半-16 時半は、増田梨花先生司会のもと、阿部浩さん（ライオンズクラブ国際協会石巻中央ライオンズクラブ会長）から石巻の復興の様子についてお話しして頂いた。阿部浩さんから現在復興が進み建物がどんどん建っていくものの「心の復興」は進んでいないということについて語られた。参加者からは、「大川小学校のお話がとても考えさせられました。私は教育学部出身なのですが、教員免許が取れないコースであることが影響しているのか、学校における災害や避難についての授業がありませんでした。ですが、授業では学ばないものの、実習やボランティアで学校に入ることはあり、そのときに震災があったかも知れないと考えると恐ろしくなりました。教員免許取れる取れないに関わらず、また、答えが出るか出ないかに関わらず、学校に関わる可能性がある人は過去から学び話し合う必要があるのではないかと思います。貴重なお話本当にありがとうございました。」という声があった。

10 月 4 日（日）10 時半-12 時には団士郎先生の漫画トークが行われた。漫画トークでは、来年度展示される予定の「アースカラー」と「ソロ泊」について紹介された。それぞれの漫画を見た後、10 分のグループセッションが行われた。参加者からの「正に病気を治すのではなく、人の心に寄り添うことの大切さ、一歩押してあげることの大切さを学ばせていただきました。」といった感想や、「団先生のお話を聞かせていただいて、いつも、

元気をいただいています。団先生の考え方、物事の捉え方ができたら、自分自身、もっと楽しく生きられるのにといつも思っています。生きやすい社会は、自分の心がけ次第で、自分の生き方を考える機会になりました。ありがとうございます。」「団先生との出会い、木陰の物語の漫画との出会いも、1年に1回の出会いですが、とても楽しみであり示唆に富んだ素晴らしい漫画で、心に積み重なっていく、心が豊かになる作品です。今回の団先生の話の中で、『私は相談の中で、病気や症状、問題を扱いたいとは思わない。その人と、その人の人生と会いたい』という主旨の話をされましたが、正に病気を治すのではなく、人の心に寄り添うことの大切さ、一歩押してあげることの大切さを学ばせていただきました。」などリピーターの方々の感想もあった。

13時-14時には支援者交流会、その後、振り返りが行われた。来年度の10年目プロジェクトを見据え、コロナ時代にどのようにプログラムを行えるかについて話し合われた。プロジェクトメンバーと現地の方々が意見を出し合い、リモートだからこそ行えること、コロナに打ち勝つ絆のこと、継続の力について語られた。その一方、振り返りでは違う機関との連携をどのようにしていくかなど現実的な問題も語られた。現地の方からは、「ZOOMでの交流会では、お一人お一人から、現在の職・活動・研究に基づく思い・意見を聞かせていただき、大変勉強になりました。学生さんの質問内容や交流後の感想も聞けて新鮮でした。これまで積み重ねられたつながりの上に立ってこそ見えてくる思いや見方について、一方、新しく入って来た方がもつ関心や疑問について、世代や様々な立場の方がこのプロジェクトに参加して率直に意見交換できることは、今後も是非続けていただきたいと思います。企画・運営に携わってくださった皆様、本当に有難うございました。」との声もいただいた。

今年度のプロジェクトは、現地に行けずリモートのみとなったが、プロジェクトをより良いものするために何度もやりとりを重ね、プロジェクトメンバー同士の絆が深まったとともに、当日に現地の方々と相互交流をすることで一層「暖かさ」を感じるプロジェクトになった。コロナ時代の中、迷わずプロジェクトの継続を決定して下さった村本先生をはじめ、プロジェクトを実現することに協力していただいた関係者の皆様全員に感謝申し上げます。

(佐藤・足立・赤松・葛西)

2020多賀城プロジェクト

団 士郎

コロナ禍で変則開催を余儀なくされた2020プロジェクト。既にむつ市プロジェクトで経験済みのリモート実施だったので、担当部分について、それほど戸惑いはなかった。

準備する「木陰の物語の物語」は例年、二つの作品を選んで、それにまつわる製作話や付随連想をつらつら述べる形式である。これを軸に、あとはライブ感覚で当日の流れに任せて

脱線するスタイルを採ってきた。

今年もそうしているのだが、二回目の多賀城で、些細なことだが気になることがあった。ZOOM 管理の関係で 30 人の定員制が採られ、参加者の名簿が事前に揃っていた。例年そうだったはずなのに、今回、名簿を見て思ってしまったことがあった。それはプロジェクトにずっと関わるこちらサイドの人が結構居るなあということである。

その人達は当然、むつ市開催と同じ話を聞く。これは以前からそうだったことだ。なのに今回、その事がとても気になってしまった。そして、その人達のために、少しは変化のあるライヴトークをと思ってしまった。

実際は全く同じ話を繰り返すことなど出来ないから、いつも一回切りである。だが、そう分かっている、何か新たな付け加えをと妙に意識してしまった。そして一つ、むつ市では登場しなかった話題を足した。

この後、宮古市、福島市とプロジェクトは続くが、また新たな追加（変更）を重ねるのかどうかは未定だ。

プロジェクトは変わらなくても、開催形式が変化すると、コンテンツも影響される。それはどちらが良いかという比較ではなく、枠組みによって様々な展開可能だということだ。

「忘れていない」というメッセージを送り続けること

文学部教授 鵜野祐介

今年（2020 年）10 月 3 - 4 日、東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 多賀城・石巻のオンラインミーティングに参加して、多賀城市役所の丸山さん、おおぞら保育園の黒川先生、臨床心理学者の上山先生と一年ぶりに、それからみやぎ民話の会の加藤さんと島津さんとはおそらく一年半ぶりに、顔を合わせることができた。また、これまで一緒に現地を訪問してきた修了生や院生の方たちとも再会できた。そして今年度のプロジェクトに参加され、充実したパワーポイント資料を作成された院生の方たちとも、PC の画面越しに感想を出し合った。2 日間を通して、オンラインではあるけれども、顔を合わせるといのはかけがえないことだと改めて感じた。この 9 年を振り返り、その足跡をたどることも確かに大切だけれども、9 年間に育んだ現地の方たちや院生たちとのつながりや絆を、顔を合わせて再確認できたことが、今回のミーティングの一番大きな成果だと思う。

丸山さんも黒川先生も口を揃えておっしゃっていたのが、ぼくたちが毎年現地を訪れ、再会できることが一番うれしいということだった。支援物資とか支援金とか、あるいは復興のための技術や具体的な方策を提供することだけが「つながること」ではない。定期的に顔を合わせて、この間の出来事や近況を聞かせていただき、またこちらの近況をお伝えして、お互いの無事や「有事」を確かめ合うこと、それもまた「つながること」の一つの形だろう。言い換えれば、「皆さんのことを忘れていませんよ」というメッセージを個別に届けること

もまた、何よりの贈り物になるのではないか、そんな気がしている。

先週土曜日（10月24日）の夜、NHKスペシャル「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」を観た。レバノンに暮らすシリア難民がコロナ禍の下でより一層の苦境に立たされていることを報じる番組だった。一人の難民青年の言葉が胸を打った。「世界はぼくたちのことを忘れているのだろう」——。（自分は誰からも見放され、忘れられた存在だ）と覚えることほど、生きていく上で辛いことはあるまい。

これは海外だけの話ではない。日本においても今、幼な子を「孤育」することを強いられている母親や父親たち、災害復興住宅に一人暮らしをする高齢者たちをはじめ、同様の心境を抱えた人たちが大勢いらっしゃるはずだ。孤独感や絶望感にさいなまれているこうした人たちに、「忘れていませんよ」というメッセージを個別に届けられる術（すべ）や仕組みを、なんとか作っていけないものだろうか。

先週はじめ、女川町の語り部・安倍ことみさんから、今年もサンマが届いた。すっかり高級魚となったサンマをたくさん送っていただいて恐悦至極に思う半面、そのお心遣いが何より嬉しく、「お会いできる日を楽しみにしております」と御礼のハガキを送った。多賀城・石巻の皆さんにも、来年はきっとお会いできることを心から祈っている。そして10年プロジェクトが一段落する再来年以降も、「忘れていない」ことを定期的に伝えるための術や仕組みを模索していきたい。

「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城・石巻」に参加して

対人援助学領域M1 佐藤 佳枝

私は、石巻の概要とこれまでのプロジェクトをオンライン授業で発表した。知人家族が仙台で被災し、震災当時の状況を聞いていたので、石巻を調べ発表したいと思った。調べていると被災状況、これまでのプロジェクト内容、証人になるとはどういうことなのかを少しずつ見えてきた。

2日間のプロジェクトに参加し、被災された方・震災直後から現地で行動してきた方の話は、被災状況が目につくリアルな物であると感じた。調べるだけではわからない話を聞き、自分にできる事、証人になるとはどういうことなのか考える機会になった。足がすぐむ現実を見ても行動できるDMATの増尾さんの話からは、自分自身も困難から目を背けてはいけないという気持ちが生まれた。多賀城市役所職員の丸山さんの「職員が食べる事、寝る事は、被災者にとって悪い事ではない」という話は、私自身も3月末まで、公務員だったので、大雨洪水警報など川の増水時には、避難場所に行き、住民の誘導をし、寝ないで、翌日勤務先の保育園に行った事を思い出し、本当にその通りだと実感した。又、避難所で、子どもにまで目を向けられなかった話も聞き、グループセッションで子どもが遊びこめる環境を作ることで、周囲の大人も笑顔になるという話ができ、グループセッションは、

リモートであっても繋がりを感じる事が出来、色々な視点があることがわかり、学びになった。そして、宮城民話の会の加藤さんの語りをお聞きし、民話の素晴らしさを実感した。今、コロナ禍でも民話の文字起こしをして、語り継ぎ 伝承しようとされていた。人の心を癒す民話は、生きる力に繋がり、復興を支え続けている。宮城県石巻市ライオンズクラブ・ボランティアセンターの阿部さんからの話からは、石巻市を調べるだけではわからなかった被災状況や絵本と音楽のコラボレーションの効果など、詳細を知る事が出来た。立命館大学が、継続して来てくれ、意味があると言っていたことが、来年度に向けての励みになった。団先生の話からは、生きやすい社会は自分の心がけ次第で、今後の自分の生き方を考える機会になった。人の暮らしに思いがけないことはなく、そういうものだと思って生きていく生き方を自分自身も心がけたいと思った。支援者交流会では、継続し、つながる意味を改めて感じた。“継続することで絆が生まれ、絆はコロナに打ち勝てる！” “継続することで、長くつながる安心感がある” “継続してやってきたからこそ できることをやっていきたい” 等の現地の方の前向きな意見は、このプロジェクトを大切に思ってくださっているからこそであると実感した。

今年度は、リモートで、現地の沢山の方のお話を聞く事が出来るのが有難い。私は、ゼミで村本先生からおおぞら保育園の黒川先生の話をお聞きしていたので、zoom の中であったもお会いできた事が嬉しかった。直接お会いして、震災当時の話を聞きたいと思った。

来年現地に行って、自分の目で見て、自分にできる事を考えて、初めて証人になれると感じた。このプロジェクトに関係してくださったすべての方々に、感謝したい。

「東日本家族応援プロジェクト 2020 in 多賀城・石巻」に参加して

臨床心理学領域 M1 葛西優花

1 日目の始まりは、増尾さんに、DMAT の取り組みから今思うことについてお話ししていただいた。全体的には、東日本家族応援プロジェクトの長期支援の取り組みとは違い、DMAT の短期支援のお話しはとても臨場感に溢れるものだと感じた。そして、丸山さんは被災者でありながら避難所のまとめ役となり、自分も辛さがあるはずなのに、他人の辛さも受け止めて活動しており本当に凄いことだと思った。

そして、午後からは「復興を支える民話の力」について鶴野先生や民話の会の皆さんにお話ししていただいた。鶴野先生の「語りとは何か」という話題で一人の人が「血の吹き上がる現実」という言葉を使っていたのが強烈でとても印象に残っている。民話の語りは、不条理に向き合い、これを抗するための術ということで、東日本大震災という大きな災害だけでなく、日常場面の小さな困難においても民話は語られていくのかもしれないと感じた。

1 日目の最後に、石巻の復興の様子について、増田先生司会のもと阿部さんにお話しし

ていただき、見かけの復興だけでなく心の復興にも目を向けなければいけないのだと感じた。

2日目の最初は団士郎先生の漫画トーク。まず、漫画を長年描き続ける今回は「アースカラー」と「ソロ泊」という漫画が紹介された。アースカラーの話では「自分の気分は気分で決めていい」という言葉がそのままファッションを選んでいるような感覚のように聞こえて面白いなと感じた。ソロ泊の話では、友人との温泉旅行で、一人で露天風呂に浸かって何十分も星や月を見ていたことを思い出し、その時の切ないような胸がいっぱいになるような気持ちも一緒に湧き上がってきた。この想起という体験こそ貴重なものなのだと思う。

次に、支援者交流会が行われた。私は、多賀城プロジェクトのこれまでにについて事前学習をしていたため、この年のこのプログラムの裏にそんなエピソードがあったのだ…と謎解きをしていくようでとても嬉しく感じた。

最後に、今回のプロジェクトでその年ごとで切断するプロジェクトではなく、過去と未来を強く意識したプロジェクトだということを再確認することができた。特に、村本先生の、中止する選択肢はなかったという言葉はとても力強いものだったと思う。来年も、多くの人の強い意志で開催されることを願う。

「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城・石巻」に参加して

対人援助領域 M1 足立 典子

今回、多賀城・石巻プロジェクトの担当として、「宮城県および多賀城市の概要」と「宮城県および多賀城市の震災概要」について調べた。これまで「多賀城」という土地についてはほとんど知識がなく、初めて知ることばかりだった。自分が調べたことがどのような意味を持つのか分からないまま発表を終え、プロジェクト本番を迎えた。プロジェクト本番に感じたのは、現地の方々、あるいはこれまで長い期間プロジェクトに関わってこられた方々の圧倒的な思いと力だった。そこで初めて、村本先生が言われていた「事前学習は重要」の意味が分かったような気がした。この方たちのお話を聴き、ともに考えようとするなら、そこへいくまでの心の準備、覚悟が必要だということである。勿論、基本的なことを知っておくという知識としての必要性もある。だが、それよりも、このプロジェクトに長く関わって大切に進めてこられた方たちときちんと触れ合うことができるようになるために、事前学習はあったのだと感じた。

今回、この会に参加していなければ決して関わることのなかった方と出会い、「災害直後の応急体制に携わった方の経験」「民話が復興をいかに支えてきたかについての話」など、貴重なお話を聴くことができ、多くの事を学び考えた。DMAT 隊員として震災直後の多賀城市に赴いた増尾さんは、その後のすっきりしない思いからこのプロジェクトに参加して

再び多賀城市を訪れ、さらに自分の経験を土台として研究を深められた。その中で、「共に同じ場に立っている人間的な出会いを、お互いに力を与え合う相互性に置き換える関わり」の重要性を感じたと話された。丸山さんは、被災直後の避難所でのことを話された。被災者でもあり行政職でもあった彼は「その時にできること」を考えて日々取り組まれたが、避難者の方の話を毎日聞き、気持ちがつながったことが何より力になったと話された。人とのつながりの大切さを改めて感じるお話だった。

災害直後に、現場におられた方たちのお話を聞いた時、今さらながら「あの時行動できなかった自分」を思った。その思いを交流の場で話すと、増尾さんが「行った人には行った人の、行けなかった人にはその人の思いや考えることがある。」と言って下さった。その時、「だから今、私はこのプロジェクトに参加しているのだ。」と感じた。また、丸山さんの「心の復興は、ずっと続く。」という言葉が、とても印象に残った。

「宮城民話の会」の方々は、「その時でなければできないことがある。」とおっしゃって、記録を書いて残すことの大切さについて話された。そうすることで語りついでいくことができるのだと、改めて思った。また、団先生の漫画トークには、ハッと気づかされる思いがした。「自分で変えられることがある」ということを、自分に問うてみようと思った。

このプロジェクトが10年継続してきたことの意味を、現地の方々とお話することで、その言葉から、実感として感じる事ができた。このことが私にとっては本当に大きな学びだったと感じている。とても貴重な体験だった。民話の会の加藤さんが言われていたように、きっとまた顔を会わせて、語り、聴き、ともに紡いでいく時間を創りたいと思う。

東日本震災支援プロジェクトから得られた私のレジリエンス

対人援助学領域M2 赤松 繁子

私は2011・3・11の未曾有の東日本震災支援活動を体験した。この年の5月3日からの被災者支援活動から6年目、2017・9月・ひたすら被災地の皆さんの復興を願って活動を終えた。

今回、再び、東日本災害支援Pに出会い、講座を学ぶ機会を得て、あらためて復興支援の課題を学んだ。当初のボランティア活動は甚大な津波被害を受けた沿岸地方で、全くゼロの世界での体当たりボランティア活動であった。

体当たりとは、現地に着くや否や闇の世界で道路か海なのか分からない道を仙台からレンタカーで石巻をはじめ、周辺の沿岸部を移動した。この状況でのボランティアとは「自活」という言葉で動く、つまり、全てを任されたNPO活動であった。やがて国や地方自治体が動き始め私達の活動は宮城県石巻を中心に岩手県沿岸部と移動した。そこでの活動は「アロマハンドマッサージとお茶っこサロン」を開設した。避難所にあたる小学校から仮設住宅へと移動した。

施せるのは悩みやストレスを聴くのではなく唯、アロマの香りのハンドマッサージをおこなった。安否を気遣う人々のお茶っこの癒し場となっていた。

ここで得た私達の体験とは「命」の大切さであった。単に人と話す、一緒に食べる、だけで人は「生きる」を感じる。つまり、人は「一人ではない」「誰かがいれば、、、」「話す人がいれば安堵する、不安は消えるということを実感した。

今回、東日本 P で感じた支援とは村本先生、はじめ事務局からの発信もあって、皆さんとのコミュニケーションをとりながら、自分の持ちものを責任もって行動していくという、他者とかかわりをもっていくことが学べた。

何をするのかを一体となって考案し、目的意識を持ったチームが東日本 P を考えるという手順は美しい協働活動であると捉えた。

過ってのボラは私やグループの考えもあって、走っていったボランティアではあったが、現地で悩んだ末の「アロマとお茶っこ」にたどりついた実施であった。

受け入れがあって忙しく走りまわったが果たして支援とはこれで良かったのかということに反省させられた。

2つの学びから得られたことは、私、個人の立ち直る力かもしれないが、この講座での学びで過去のボランティア活動も日常生活において様々なストレスはあっても精神的健康を保てるよう他者を援助するという向社会的行動を負担に感じることなく働くという価値観であるとした。

支援とは奉仕でもなく自分の健康維持のためにたとえ、ネガティブな心理状態に陥っても回復できるレジリエンスを高めたためのいい機会となった。

立命館大学東日本・家族応援プロジェクトin多賀城・石巻 2020 リモート

2011年から始めた10年プロジェクト。宮城県は、多賀城と石巻で開催しています。
今年度はコロナ感染拡大防止のため、ワークショップなどの開催は次年度に持ち越しますが、団士郎家族漫画展は図書館で、団士郎漫画トークは、オンライン配信で開催いたします！
来年は、皆様と一緒にプロジェクトができることを願っています。

団士郎家族漫画展

会期: **9/25(金)~10/18(日)**

場所: **多賀城市立図書館**

A棟2階 西側共有スペース



文庫版「木陰の物語」を差し上げます(数量限定)

団 士郎

立命館大学大学院人間科学研究科客員教授

家族療法家・漫画家

公立の児童相談機関心理職25年を経て独立。「仕事場D・A・N」主宰。漫画家でもあり、「かぞくのじかん」(婦人之友社)ほか数誌に「木陰の物語」連載中。マンガ集団「ぼむ」同人、web雑誌「対人援助マガジン」編集長

10/04(日)

一般公開

団士郎漫画トーク

時間: **10:30~12:00**



家族への思いから作られた「木陰の物語」!
活動10年目を迎えた今の気持ちなどをお話したいと思います。
申込方法: いずれかの方法でお申し込みください。

① <https://forms.gle/gcEQ2AZEtr3dTh6LA>

② QRコードより⇒



定員
30名

申込期間: 9月25日(金)9:00~10月2日(金)17:00
*期間中定員に達した時点で締め切らせていただきます。

支援者交流会

時間: **13:00~14:00**

現地支援者の皆様との情報交流、これまでのプロジェクトを振り返り、次年度を検討します。



主催・立命館大学大学院人間科学研究科
共催: 多賀城市立図書館
協力: おおぞら保育園

研究会

月日: **9/21(月)**

時間: **13:00~14:30**



むつ報告&多賀城・石巻9年の振り返り

8月に実施したむつプロジェクトの報告と、多賀城・石巻プロジェクトの9年の紹介を報告します。

報告者: 各地プロジェクト担当院生

10/03(土)

災害直後の応急体制に携わった経験から今おもうこと DMAT隊員と被災者・行政が見た多賀城

時間: **10:00~12:00**

私たちのプロジェクトが初めて被災地に入ったのは発災から半年後、多賀城市に入ったのは1年半後です。被災時の多賀城はどんな様子だったのか、本研究科修士生のDMAT隊員、避難所運営者の視点から語っていただきます。

<講師>

増尾 佳苗氏 (大津赤十字病院DMAT隊員・災害看護)
「災害救護者が再び臨地に立ち知り得た事」

丸山 隆氏 (多賀城市建設部都市計画課次長・課長)
「被災者の目・行政の目を見た東日本大震災の記憶」



ミニシアター

復興を支える民話の力

時間: **13:00~15:00**

民話とともに東日本大震災を乗り越えた人々の声と思いをつなぎ合わせ、全国に発信してこられたみやぎ民話の会の方がたとともに、復興を支える民話の力について考えます。

<パネリスト>

島津 信子氏	(みやぎ民話の会代表)
加藤 恵子氏	(みやぎ民話の会会員)
村本 邦子	(立命館大学教授)
鶴野 祐介	(立命館大学教授)



石巻の復興の様子について

時間: **15:30~16:30**

初年度より石巻の現地受け入れ窓口をしてくださっている阿部 浩氏に、2011年から現在そしてこれからの石巻について、お話をお聞きます。



<講師>

阿部 浩氏 (ライオンズクラブ国際協会 石巻中央ライオンズクラブ会長)

司会: 増田 梨花 (立命館大学教授)

<お問合せはこちらまで>
立命館大学大学院人間科学研究科 震災復興支援プロジェクト
東日本・家族応援プロジェクト事務局
Email: ejfspj2011@gmail.com



10月4日
(日)

団士郎漫画トーク

◆ 時 間：10:30~12:00

◆ 定 員：30名

◆ 参加費：無料

オンライン
配信

家族はたくさんの思いがけない悲しみや苦しみも運んでくれます。
しかし一方、家族を得ることが、こんなにも自分の人生を豊かにしてくれるのだと実感する人もたくさんいます。
そんな家族への思いから作られた「木陰の物語」。
活動10年目を迎えた今の気持ちなどをお話したいと思います。
お時間が合いましたら是非ご参加ください。

団士郎家族漫画展

9/25~10/18

多賀城市立図書館2階
西側共有スペースで開催中！



講師：団 士郎

立命館大学大学院人間科学研究科客員教授
家族療法家・漫画家
公立の児童相談機関心理職25年を経て独立。
「仕事場D・A・N」主宰
漫画家でもあり、「かぞくのじかん」（婦人之友社）ほか数誌に「木陰の物語」連載中
マンガ集団「ぼむ」同人、web雑誌「対人援助マガジン」編集長



《昨年度アンケートより》

- ・ いつも団先生のトーク、楽しみにしています。キュンとなる話、なるほどなるほどの話、明日からやってみようと思える話、とても心の栄養になる話ばかりです。これからもよろしくお願いいたします。ありがとうございました。
- ・ 誰かに話を聞いてもらって気が楽になったということを自分も体験していたので、「なるほど」と思いながら聴くことが出来た
- ・ いつも聞いてスッキリ！！「変化」大事にいて生きていこうと思います。ステキな企画ありがとうございました。

◆参加条件： Zoomを使ったオンラインでのトークとなります
インターネット環境があり、パソコン（カメラ・マイク内蔵、もしくは別にセットしたもの）
もしくはスマートフォンの準備が必要です

◆申込期間： 9月25日(金) 9:00~10月02日(金) 17:00
* 申込期間中定員に達した時点で、締切らせていただきますのでご了承ください

◆申込方法： いずれかの方法でお申し込みください

① <https://forms.gle/gcEQ2AZEtr3dTh6LA>

② QRコードより⇒

